

越後米沢街道・十三峠

「越後米沢街道・十三峠トレッキング2022」が開催されました！



2022年10月29日山形県小国町、飯豊町、川西町の越後米沢街道にて、「第4回越後米沢街道・十三峠トレッキング2022」が行われました。

越後米沢街道は、山形県置賜地域と新潟県下越地域をむすぶ街道で、伊達植宗（たねむね・正宗の曾祖父）が1521年に大里峠を開いたのが始まりといわれ、大小13の峠があることから十三峠と呼ばれています。

トレッキングは13の峠を、4つのコースに分けて、ガイドの案内により街道の史跡や自然にふれながら峠道に行くもので、年間で全4回のトレッキングを通して、十三峠を踏破できるコースとなっています。今回レポートするのは第4回のコース、イギリスの旅行家イザベラ・バードが「東洋のアルカディア」と讃えた景色を望む歩行距離10kmのルートです。今回、県内外から6名が参加されました。





▲宇津峠に残る道普請供養塔。米沢藩では天保6（1835）年から人足総数18,500人で敷石工事などを行ったと記されている。

今回ガイドを務めたのは、パートナーシップ団体である越後米沢街道・十三峠交流会のメンバーの岡村さん。街道沿いに多く残る史跡や自然について、とても興味深くわかりやすい説明に参加者の皆さんは耳を傾け、秋の峠道を歩きます。

秋の峠道は、実り豊かです。道沿いにはブナシメジ、アケビ、サルナシ、ヤマブドウなど。サルナシはキウイフルーツの近縁種だけあって、その美味しさに皆さんから驚きの声があがりました。



▲ブナシメジの収穫



▲アケビ

お昼休憩には、事務局の加藤さんが用意して下さった温かい芋煮がふるまわれました。牛肉とお野菜のうまみが温かいお汁に溶け込み、大変美味しく、皆さんおかわりをしていました。白菜が多いのは、小国町風とのこと。

ふるまわれた芋煮▶





▲「イザベラ・バード眺望の地」からの風景 イザベラ・バードは著書「日本奥地紀行」にて「私は、うれしい日光を浴びている山頂から、米沢の気高い平野を見下ろすことができうれしかった。」と記している。

このトレッキングイベントは平成 24 年からほぼ毎年実施されており（新型コロナの影響により令和 2、3 年は中止）、年間 4 回の全コースを踏査された参加者には「十三峠踏破証」と手ぬぐいなどの副賞が贈られます。

事務局では、今年からこのトレッキングを旅行商品として販売を始めました。また、受け入れ側の魅力を向上させるためには、街道の案内人を育てていくことが重要と考え、「案内人構成講座」を行うなどの取組を行っています。

残念ながら今年は、8 月の豪雨により、沿道に土砂崩れがあり、3600 段の美しい古の敷石道が残されている黒沢峠をゆく第 3 回トレッキングが中止となってしまいました。一日も早い整備が望まれており、今後の開催が期待されます。

今回参加していただいた皆さんにトレッキングの感想を聞きました。

- ガイドさんの説明が素晴らしく、単独では歩けないところを歩けて楽しかったです。
- 秋の恵みを堪能できました。これからも続けて頂きたいです。



▲道の駅いで 途中休憩に利用。



▲峠のスタンプラリー 踏破した峠を台紙に記録する。